

1980 年以降のディケンズ批評

ディケンズと新歴史主義批評

Dickens and New Historicism

村山 敏勝

Toshikatsu MURAYAMA

1980 年代以降のディケンズ研究を考えるには、新歴史主義的な立場の批評を無視することはできまい。しばしば定冠詞をつけて呼ばれる狭義の新歴史主義 (the new historicism) は、*Representations* 誌を根城とした批評家の集団であり、その理論的骨組みはミシェル・フーコーの言説論と権力論である、といてよい。その後彼らの影響は多方面に広がるが、批評用語辞典風に単純化すれば、その最大の特徴は次の二点となるだろう。文学以外のテキストを文学テキストと区別せず、どちらも時代の言説の一部をなすものとして分析する。こうして言説が生み出す権力空間は、あらゆるものを包みこむ全体的なものであり、そこから逃れるものはないと考える。一元論的な権力論をベースにしつつ、多様な非文学テキストを、あたかも文学作品を分析するような精緻さで捌いていくという新歴史主義批評の特徴をもっとも端的に示めるのがスティーヴン・グリーンブラット (Stephen Greenblatt) の著作であり、これにルイス・モントロース (Lewis L. Montrose) など他のルネサンス研究者、アメリカ研究のウォルター・ベン・マイケルズ (Walter Ben Michael) といった名を典型例として付け足すこともできるだろう。もっとも、一貫してパークレーに留まって近代イギリス研究における代表的な新歴史主義者とみなされてきたキャスリン・ギャラガー (Catherine Gallagher) とグリーンブラットは、共著 *Practicing New Historicism* (2000) の序文で、新歴史主義という「実体」や教条的な運動は存在せず、むしろ自分たちはシステム化に抗ってきたのだ、と言っている¹が、現在から振り返って、80 年代の彼らの仕事の特徴を大まかにまとめることは許されてよいだろう。

言説論においては、「個人」は基本的に問題にならない。現代のヴィクトリア朝小説研究におけるモノグラフの地位の相対的低下は、この点と関係している。個人は、フーコーが「作者とはなにか」で語ったように、さまざまな言説を結び合わせる一つの点として機能するが、そこに独立した人格をもった人間を描

き出すことは要請されない。今回のパネルで唯一固有名がタイトルになっているアレクザンダー・ウェルシュが、伝記的にディケンズ個人の軌跡を描く批評家であることは象徴的といえるだろう。ウェルシュの批評はディケンズ個人の人生を問題にするが、新歴史主義的方法では、むしろ時代のネットワークの全体を描き出すことが求められる。したがって「ディケンズと新歴史主義」を語るのがやや困難な理由の一つは、「たまたまディケンズを扱っている言説論」を、ディケンズという一人の個人の名に回収するのが難しいことにある。新歴史主義批評は、文学テキストと同時代言説の共通点を指摘するばかりで、作家の独自性の指摘がなされない、という不満は、伝統的な立場からしばしばもられるものである。この指摘が的を得ているかどうか、具体例を追って考えてみよう。

ヴィクトリア朝小説研究においては、先ほど新歴史主義批評の特徴として挙げた二点をともに満たす典型的な書物を挙げることはじつは難しい。*Representations* グループの19世紀小説論でフーコーの権力論を援用した代表例とされるD・A・ミラー(D. A. Miller), *The Novel and the Police* (1988)は、ディケンズ、コリンズ、トロロープをおもに扱い、小説はブルジョワ中産階級の「規律」を読者に教え込む装置である、という議論を全面的に展開した。一元的権力論の小説研究へのもっとも徹底した応用といってよい。ただしミラーは資質としてまったく歴史家的ではなく、作品以外の一次資料を読むという面倒なことはやろうとしない。作品の細部に耽溺しつつ、作品の持つ政治的含意と、自分がそれを論じていることの政治的含意とを二重写しにしていくパフォーマンスにこそ彼の特徴がある。以下は全体の核ともいえるべき、*Bleak House* を論じた章の終わり近い部分である。

小説形式が真に保証しているのは、個人と社会、家庭と制度、私生活と公生活、余暇と仕事の、緊密な重なりあいなのだ。小説はブルジョワ産業社会のリズムの教練場であり、家に（小説読書が再開される場だ）帰りたいたいというノスタルジックな欲望を生み出すとともに、読者を鍛えて、定期的に（小説がみずからの正当性と真実を見出す世界のために）家を離れることに慣れさせる。小説を読む読者は、問題に満ちた私生活　いつも放棄されるが、いつもまた取り戻される　をいかに生きるべきか、予行演習をさせられるのである？

権力と、その外部である家庭／プライベートの領域を対立させつつ、小説はそのどちらでもありどちらでもない、という揺らぎ自体に快楽を味わい、しかもそれを指摘する批評という行為の政治性と快楽もまた意識化する、という姿勢がここにはうかがえる。ミラーの新著³は、ヘテロセクシュアル・プロットの

王道というべきジェイン・オースティンを、ゲイ的ないし性的なアウトサイダーの視点から読み替えようという試みである。ここでも、そこで描かれている欲望が異性愛的なものなのか同性愛的なものなのか、どちらでもない解釈の揺らぎに耽溺していくスタイルが際立っており、およそ「歴史主義」ということから連想されるものとは隔たっている。

The Novel and the Police については、出版当初から、その権力観があまりに包含的で全体化しすぎている、という批判が当然行われてきた。マルクス主義フェミニストの立場から、ミラー的なフーコー受容に敗北主義的姿勢を見出すジュディス・ニュートン(Judith Newton)の論文⁴はその一つの典型である。近年になっても、たとえばパム・モリス(Pam Morris)は、*Bleak House* を素材に、1840、50年代のイギリスの政治事情は、中産階級権力に一元化されたものではなく、貴族支配も強ければ、エドウィン・チャドウィックに代表されるような中央集権指向への反発も強くあった、と指摘してミラーの権力論の非歴史的単純さを批判している⁵。いっぽうマシュー・ティトロ(Matthew Titolo)は、ミラーの方向性に沿ったかたちで、デイヴィッド・コパーフィールドとユーライア・ヒープという二人の事務員を、近代的職業規律を身につけていく典型的な主体として論じている⁶。ミラーに対する評価は正反対だが、いずれにせよ、ミラーの仕事の核となった *Bleak House* 論が *Representations* 誌に掲載されてから 20 年たったいまも、フーコー的な権力をめぐる議論は終わったわけではなく、政治史との関連で、あるいは主体がおかれた個々のケースを分析することで、それを精緻なものにしていく作業は今後も続いていだろう。ただし、文学が権力の内であるか外であるかに決着をつけようとする態度は、すでに過去のものともみてよいかもれない。文学は制度の外部にはない、ときわめて挑発的に説くミラーに、そんなはずはない、文学は外部である、あるいはあるべきだ、とする反論は、しばしば感情的なものになり、しかもミラー自身がすでに、文学は外部でありつつそうでないという二重性を指摘しているために、議論は不毛な堂々巡りに陥る可能性が強いからである。この対立は純粹にイデオロギー的な、テキストの詳細な分析がなくとも議論できる種類のものであり、その流行はすでに去ったといってもよい。ギャラガー&グリーンブラットの *Practicing New Historicism* も、自分たちの出発点を振り返りながら、ほとんどこの問題に触れていない。

いっぽうミラーが行っていない、非文学テキストと文学テキストを横断していく方法は、ディケンズ批評になにをもたらしただろうか。新歴史主義は、構造主義的ないしニュークリシティズム的な「歴史の排除」へのアンチテーゼとして、文学を純粋化せずに外部へと接続することを目指した。しかしディケンズ批評においては、非文学資料の探索はむしろ当たり前の態度といえる。ハン

フリー・ハウス (Humphry House) やキャスリーン・ティロットソン(Kathleen Tillotson)といった「旧歴史主義」者たちも一次資料を駆使したのだし、日本のディケンズ研究もまた、歴史資料の積み上げを基礎とした方法が「主流」となってきたといってよい。J・ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller) のような「形式主義的」分析のほうが例外と思えるほどであるという事態は、ディケンズという作家のありかたを端的に物語っている。彼は同時代のほとんどあらゆる事象を小説にとりこもうとし、自ら編集する雑誌上で直接ジャーナリスティックな発言を続けた。こうした作家の場合、歴史と文学とを結びつけるのに高度な言説理論は必要ないとすらいえる。言説理論は、グリーンブラットに典型的にみられるように、およそ無名のテキストの断片や逸話を「資料」として用いることを可能にした。伝統的な実証主義や比較文学研究の手法とは異なり、そうした無名の資料を作家が直接知っていたかどうかは問われない。たんにすべてを一つの流動的な言説空間に同居するものとして扱えばよいのである。しかしディケンズのように行動範囲が広い作家の場合、言説理論がなくとも、じつは資料収集の作業自体にあまり変化は生じない。ほとんどあらゆる社会問題に関して、ディケンズ自身が、あるいは彼に近い人が直接書いたものを読むことができるからだ。となると問題は「なにを」読むかではなく、「いかに」読むかになる。

非文学テキストの分析がもう一つの特徴である権力論とどのように絡むかを確認するためには、先ほど述べたようにミラーは参考にならないので、キャスリン・ギャラガーを例にとってみよう。以後の産業小説論に決定的な影響を与えた *The Industrial Reformation of English Fiction*(1985)では、現在の目ではやや意外とも思えることに、フーコーへの言及は一切なく、全体化する自己産出的な権力は論じられていない。彼女がはっきり一元的権力論に触れているのは、1984年に *Dickens Studies Annual* に掲載された *A Tale of Two Cities* 論においてである。これは単行本に収録されていないため比較的言及されることが少ない論文だが、ミラーの方法が歴史資料に開かれたときにどのようなかたちをとるか、もっとも早い時期に実践した典型例と考えてよい。

ここでギャラガーは、小説中に出てくる三つの現象　公開処刑、フランス革命、死体盗掘を、それぞれ小説内部におかれた小説装置の相同物とみなす。

最近注目を浴びているヴィクトリア朝の自己言及性のまず第一の技法は、小説的語りの相同物を小説に挿入するというものであり、この相同物は、作家が客観的な現実を受動的に映し出しているふりをしているときですら働いている、語り手の構築的な機能をさらけ出す。[...]まさに小説と競合しているがゆえに、語りが自分自身の相同物とみなしている三つの社会現象をいまから論じよう。イギリスの公開処刑、フランス革命、死体盗掘

は、いずれも小説の内的相同物であり、それ以上のものでもある。[...]
これらの現象はいずれも、私的領域を荒々しく蹂躪するものとして描かれて
いるのだ？

文学作品中に文学の自己言及の例を見出すという作業は、ディコンストラクション批評の十八番であり、ディケンズ批評においても、法律文書の堆積を記号の読解不可能性のメタファーとみなしたJ・ヒリス・ミラーのペンギン版 *Bleak House* への序文などによって、広く受け入れられる視点となっている。ただギャラガーはヒリス・ミラーと異なって、小説内の小説的現象に政治的性質を見出す。公開処刑その他は、プライバシーの領域を侵犯するものとして小説に似ているのである。ここでとくに重要なのは、小説がプライバシーに関してきわめて両義的な存在であることだ。小説は、他人の人生を暴き立てるという意味でプライバシーの侵犯機能を持つと同時に、社会から切断された自分の書斎や寝室で浸る個人的な楽しみのものであるという意味で、徹底してプライベートなものだからである。近代社会における小説の政治的機能とはまさに、政治的・社会的な問題を扱いながら、それ自体が非政治的な領域に置かれていることにあり、新歴史主義はこれ自体を問題視した。ギャラガーは引き続き、公開処刑や死体盗掘を論じた同時代資料を引き合いに出し、これらがプライバシー侵犯とみなされている言説を例にあげていく。資料それ自体は、同僚であるトマス・ラカー (Thomas Laqueur) やリン・ハント (Lynn Hunt) の著作からの孫引きがおもで、珍しいテキストの発掘作業は行われておらず、また短い論文なので、*Industrial Reformation* のような資料の量的充実もない。しかしここでは、D. A.ミラーの図式 文学は権力の内部でもあり外部でもある が、はっきりと文学以外の領域に開かれている。ギャラガーは、小説をモデルとした図式をその外部に拡大し、*A Tale of Two Cities* 内部にとどまらず、小説の外の公開処刑やフランス革命を、小説に似たものとして分析し直しているのである。

Representations 一派の仕事は、偉大な作家の個性、差異を記述する方法ではない、という批判はしばしば聞かれるものであり、たしかにギャラガー論文では、ディケンズのテキストが同時代の他のテキストと相同形をなすものとされている。ただしギャラガーは、(偉大な)文学を(凡庸な)歴史に回収している、とは必ずしもいえない。むしろ彼女の作業は、プライバシーを賞揚しつつプライバシーを暴くものである小説という装置のメカニズムを、歴史のいたるところで反復させることであり、われわれがディケンズから学んだことによって、文学以外の言説を逆に照射していくことだからだ。その意味では、新歴史主義批評はわれわれに、ディケンズのテキストについてなにかを教えてくれる以上に、文学という領域に属さないテキストについて教えてくれると言える。良く

も悪くも、文学が歴史化される以上に、歴史が文学化されるのである。

相対的に新しい具体例として、ディケンズと当時の金融事情との関係を追った二本の論文、メアリー・プーヴィー (Mary Poovey), *Making a Social Body* (1995) に収録された *Our Mutual Friend* 論と、2000年のELHに発表されたゴードン・バイジロー (Gordon Bigelow) の *Bleak House* 論を見てみよう。プーヴィーの論文は、1855年の有限責任法、1856年の株式会社法が、株式会社の出費者や経営者の返済責任を限定し、経済領域の独立性を進行させたと捉えている。ただし同時に、経済領域はきわめて流動的でリスクであり、しかも会社を破綻させた経営者の責任はある程度までしか問われないのだから、社会はますます不道德なものになっていくのではないか、という不安がここに伴ってくる。*Our Mutual Friend* が、アルフレッド・ラムルの社交界での上昇と墜落というかたちで、当時の経済界の不安定性を描いていることはまちがいない。プーヴィーの議論がアクロバティックな展開を見せるのは、ジャーナリストのマルコム・ロナルド・レイン・ミーズン (Malcolm Ronald Laing Meason) が1863年から65年にかけて *All the Year Round* に掲載した、投機と株式をめぐる一連の文章を持ち出すときである。ここでミーズンは、会社を作り潰すことを、子どもを産み育て殺すことの比喩で語っている。しかしこの比喩からすると驚くべきことに、会社を潰すことは悪いことではない。一つの会社を潰しても莫大な借財を背負うわけではなく、新たに次の会社を作ればよいので、子どもは次々殺せばよいのである。「投機を『大男に成長するだろう子ども』と呼ぶ語り手は、再三『子殺し』を口にする。このメタファーによれば、有限責任法によって、幼児殺しは罪がないばかりか、儲かるものにもなったのである」⁸。しかも経済人である男性が子どもを産みかつ殺すのだから、女性は比喩的にも排除されている。プーヴィーはミーズンのこのレトリックを、小説中、ポフィン夫妻が養子を探す際の「孤児市場」の挿話と、さらにはベラ・ウィルファーをあたかも金融商品であるかのように呼ぶ「真の黄金」とか「もっとも価値ある麗しき商品」といった形容と対比させる。ミーズンが株式に子どもの比喩を用いるいっぽうで、ディケンズは養子縁組や愛する妻に対して株式やバブル経済の比喩を用いる。ディケンズは、投機の世界が家庭の領域に侵入してくることを不安を描きつつ、ベラのような正しく家庭的な女性に経済の比喩を用いることで、経済用語から一種の毒抜きをして、安定した家庭のイメージに回収している、ということになる。

わたしの要約はこの論文のごく一部を取り出したものだが、われわれの文脈で指摘できることはまず、ここでの分析が作中の明示的な株取引そのものではなく、比喩の、レトリックのレベルに向かっており、ミーズンの非文学テキストもまた文学テキスト同様にその比喩が注目されていることである。ディケン

ズのテキストとミーズンのそれは、ただどちらも金融について触れているというだけではなく、似通ったレトリックを用いるものとして比較され、相同関係に置かれている。両者の題材が似ているのではなく、テキスト自体が似ているのであり、この点プーヴィーはギャラガーと同じかたちの議論を行っている。またミーズンのエッセイが、*All the Year Round* という、ディケンズ研究者なら目を通して当然の媒体に載ったものであるということも指摘しておいてよいだろう。資料の収集過程は「旧」歴史主義と異なるものではなく、意表をつく場所から誰も知らない資料が引かれているわけではない。

バイジローの論文は、1847年銀行憲章、つまりピール政府による金本位制の制定を、貨幣の無限の流通とそれがもたらす不安定＝経済恐慌への不安を回避するものとみなすところから出発している。*Bleak House* の大法院は、貨幣流通と同じく外部を欠いたシステムであり、ここでは紙とインクでできた法律文書が、同じく紙とインクでできた紙幣と同じように、なんの結論にも達せず、外部に向かうことなくただ循環しているのである。この流通システムにおける銀行の曖昧な位置を指摘するために引用されているのは、ディケンズがW・H・ウィリス(W. H. Wills)と連名で1850年の*Household Words* に発表した“The Old Lady in Threadneedle Street”と題するエッセイである。イングランド銀行のニックネーム「老貴婦人」をタイトルとしていることから想像されるように、このエッセイは銀行を精神物質両面で豊かさや愛に満ちた家庭の比喩で物語る。

ある貯蔵庫は、どうも牡蠣の樽らしきもので一杯だ。……べつな貯蔵庫では、金の延べ棒が、夕餉のサンドイッチか菓子屋のビスケットの山のように互い違いに、たっぶり積み上げられている。……こうして暗い隅っこに積まれた山は、放っておかれたチーズか、黄色い石鹸のようだ。……要するにスレッドニードル街の優しい老貴婦人は、彼女の庇護にある者たちを、いちばん強い絆で……愛の絆で……慕わせているのだ？

ここでも家庭のイメージは、不安定な貨幣流通に対する不安を鎮め、安定させる機能をはたしている。*Bleak House* は直接イングランド銀行に言及していないが、記号の絶えざる外部なき流通というイメージのレベルでは、小説を金融と結びつけることができる。その傍証として持ち出されているのは、ディケンズ自身のエッセイである。さらにこの論文では、ウォルター・バジョットの金融論における性的な隠喩が論じられるが、この選択は恣意的とは感じられない。バジョット自身がディケンズを論じた文章があり、そこでの否定的評価　ディケンズの世界はあまりに多様で、作中の諸要素は緊密に結びついてはいない　は、強く統合

された制度を肯定する彼の金融論を思い起こさせるものだからだ。

バイジローについても、プーヴィーと同じことが言えるだろう。ディケンズの小説テキストと彼自身のジャーナリスティックなテキスト、それにバジヨットの著作はいずれも、レトリックのレベルに注目されて、相同的な関係に置かれる。また引かれているのはどれも、あまり知られていないがディケンズとの結びつきが明らかなテキストである。この点は、ヴィクトリア朝作家のなかでもとくにディケンズ批評の現在を特徴づけるものだろう。他の作家に比べて、ディケンズ、そしておそらくジョージ・エリオットの場合、彼らのあまりに広い活動範囲ゆえに、現実の彼らと一見関係のないテキストを見出してくる必要がない。あるいはそのようなテキストを探すこと自体がそもそも困難とすらいえる。繰り返せば、資料の探索の手順においては、ディケンズの「新」歴史主義批評はべつに新しくない。ただ新しいのは、ディケンズの読解から得られた意味の構造を、文学以外の領域に再び見出そうという姿勢なのである。バイジローの論文は明らかに、文学批評ではおなじみのディコンストラクショナルな言語論を経済の領域に輸出している。記号の意味はつねに不安定である、という議論が経済の領域で反復され、貨幣の意味はつねに不安定である、という言説が見出されているのである。

最後にジェンダーの問題に触れて終わることにしよう。プーヴィーもバイジローも、家庭のメタファーを論の中心に据え、良き家庭のイメージが不安な経済問題を隠蔽する、という同じ議論を立てている。ジェンダー・イメージ、良き母としての女性像をイデオロギー的な頼り綱、意味を固定化する錨として他の領域の不安を鎮める、という構造の指摘は、いまやヴィクトリア朝小説批評の王道のパターンといってよい。いうまでもなくこの傾向はフェミニズム文化分析一般のもので、新歴史主義やヴィクトリア朝研究特有のものとはいえないが、われわれの文脈で新歴史主義とジェンダー論の接点の必然を論じることは可能だろう。要するに、家庭は小説と似ている。ともに守られるべきプライベートな場であり、政治の「外部」であるという意味で、小説がプライベートな場として立ち現れる以上、その分析が家庭というイデオロギーの分析と似てくることは、当然とも言える。すでに述べたように、わたしはこれについて、小説読書の経験が、現実の家庭というイデオロギー経験の反復として矮小化される、とは考えない。むしろ書斎という閉じた場で、一冊の書物という限られた空間であるがゆえに見え易くなる構造が、その外部へと延長されていくように思える。言説論の反人間主義から考えればきわめて不適切な言いかたではあるが、「文学から人生を学ぶ」という事態の反復が、あるいは新歴史主義の営為なのかもしれない。

注

- ¹ Catherine Gallagher and Stephen Greenblatt, *Practicing New Historicism*. (U of Chicago P, 2000) 1-4 .
- ² D. A. Miller, *The Novel and the Police*. (U of California P, 1988) 83 . ミラー 『小説と警察』 村山敏勝訳 (国文社, 1996) , 109 .
- ³ D. A. Miller, *Jane Austen, or The Secret of Style* (Princeton UP, 2003) .
- ⁴ Judith Newton, “Historicisms New and Old: “Charles Dickens” Meets Marxism, Feminism, and West Coast Foucault.” *Feminist Studies* 16. 3 (1990): 449-470.
- ⁵ Pam Morris, “*Bleak House* and the Struggle for the State Domain.” *ELH* 68 (2001): 679-698 .
- ⁶ Matthew Titolo, “The Clerk’s Tale: Liberalism, Accountability, and Mimesis in *David Copperfield*.” *ELH* 70 (2003): 171-195.
- ⁷ Catherine Gallagher, “The Duplicity of Doubling in *A Tale of Two Cities*.” *Dickens Studies Annual* 12 (1984): 125-126.
- ⁸ Mary Poovey, *Making a Social Body: British Cultural Formation, 1830-1984* (U of Chicago P, 1995) 163 .
- ⁹ Dickens, “The Old Lady in Threadneedle Street,” *Household Words* 1 (1850) 340. Cited in Gordon Bigelow, “Market Indicators: Banking and Domesticity in Dickens’s *Bleak House*.” *ELH* 67 (2000): 601-602 .